

くまざんだお

日本基督教団 豊橋東田教会

〒440-0055 愛知県豊橋市前畑町 112 ☎0532-54-3435

ホームページ <https://azumada.org/> 武井恵一牧師 080-3428-3200

2019年

4月号

4月21日発行

イラストは全て池谷陽子さんご提供

4月14日 受難節第六主日礼拝説教

「神は愛」武井 恵一牧師

ヨハネの手紙一 4章7～12節 新約聖書445頁

今日の聖書箇所は『聖書を読む者の、クライマックス』といってもよい聖書の言葉です。もちろん、『聖書そのもののクライマックス』ではありません。

使徒ヨハネの、この聖書箇所は、三位一体の神様を心から愛し、心から信じる言葉です。父なる神様、主イエス・キリスト、聖霊であられる神様が使徒ヨハネにこのように断言し証しすることを許されたと信じて喜びます。三位一体の神様ご自身もこの真実の告白を喜ばれたと信じます。

この言葉によって、神様に造られた人間を神様がどれほど愛されたかが心から伝わります。この言葉を手紙で全キリスト者に告げた使徒ヨハネは、まさしく「主イエスが愛された弟子」です。

主イエスが愛された弟子は星の数以上に大勢いるでしょう。ここにいる皆さんの中にもおられるでしょう。

けれども、新約聖書に特定して記されているのは、十二弟子の中心で活躍した、使徒ヨハネだけです。新約聖書でヨハネは「イエス・キリストが愛された弟子」と呼ばれています。

主イエスは、使徒ヨハネが「ヨハネの手紙一」でこのように「『神が愛であること』を公に告げ、『主が信じる者を愛されていること』、その真実と真理をすべての人間に伝える」この言葉を



全キリスト者に告げていることを、はるか以前から知っておられた。

わたしは今、主イエスは「この手紙を書いた使徒として＝ヨハネを愛された」と理解します。

今日のメッセージに取りかかって、わたしは改めてこのことに気づき、ここで皆様にお伝えいたします。

先ほど、尾崎長老に朗読いただいた「ヨハネ手紙一」の言葉をここから丁寧に解き明かしましょう。

ヨハネの手紙一 4章7節

「愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。」

この言葉は、非常に大胆な証しです。いいえ、「非常に大胆」という言葉でも、その大きさは皆さんに伝えきれないと思います。この言葉は、人間が語ることのできる大きさの限界・究極に「最大限に近づいた言葉」というべきかも知れません。

ただし、この言葉はヨハネ自身が、彼の頭で考え発言したのではないと考えるべきでしょう。ヨハネは、感受性が豊かな人であり、また、主イエス・キリストに圧倒され、その愛を心いっばいに、魂にまで豊かに受け、自覚した弟子です。使徒ヨハネが、主イエスに間接的に与えられた、とさえ思われます。

ヨハネの手紙一 4章8節

⁸愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。

更にこの言葉は、人間存在自体について、逆に指摘しているとも受け止められます。すなわち「愛」を、もっぱら「自分自身に絞って集中し、受けとめ、そこから理解した」と見られるからです。

もしかすると「これこそ『罪』の根源」と言えるかもしれませんが。神の中心にある愛を理解しなかった。

実際、人間は「神が愛であられる」のを知らなかった——人間が「神の似姿」として造られたとき、「自分自身を知らなかった」、あるいは「禁じられた木の実を食べ——神に逆らって、肝心なものを失った」とも言えるでしょう。

更に8節の言葉は実際に人間社会での恐ろしい現実を指しています。

「神を知らない人間は、『愛』を知らない人間存在だ」ということです。

「愛を知らないこと」こそ、とりわけ「神の愛を知らず、受けとめていない」ことこそ、人間の「罪」の大もとであり、人間世界の巨大な「悲惨」の紛れもない根っこです。

これは、皆さんそれぞれが毎日ぶつかっている現実です。多くの人間は「神を知らない!」

この現実には、キリストの神を信じる私たち自身が「キリストの福音をすべての人々に伝え、共に信じる者とされなければならない」、福音宣教の重要さがハッキリ示されている重大な事です。

ヨハネの手紙一 4章9節

⁹神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。

神様が独り子主イエスをこの世界に遣わされ、そのイエス・キリストによってわたしたちが生かされる。

わたしたちが生きる存在になると、使徒ヨハネ

は言いました。これも、神様の愛です。神様の愛によってわたしたちが生きるのです。

ヨハネの手紙一 4章10節

¹⁰わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。

使徒ヨハネは、まず、神様がわたしたちを愛して下さったと、この順序をしっかりと確認します。神様こそが「愛である」ことから始まるのです。わたしたちが神様を愛する前に、最初に神様の方からわたしたちを愛されたと明らかにされました。

神様がわたしたちを愛された具体的な出来事として、御子イエス・キリストを人間の世界に遣わされた。

しかも、「神様は、御子イエスを『いけにえとして、お遣わしになられました。』と告げられ」ました。

ここに、「神の愛」が疑う余地なく示されました。

わたしたち人間は、既に、イエス・キリストが「いけにえ」として、十字架に架けられ、命をささげられたことを知っています。父なる神様は、このように、愛する一人息子を「人間のための『いけにえ』」として与えられたのです。

「ここに、真実の愛があります」。



わたしたちは、思い起こさなければなりません。使徒ヨハネは『ヨハネによる福音書』を人間世界に与えた中心人物です。しかし、それ以前に、既に『マタイ、マルコ、ルカの共観福音書で記され、世に現された聖書に記されている使徒たちの一人』です。

マタイ、マルコ、ルカ福音書に記されているゲッセマネの園で、主イエス・キリストが血の滴るような苦しみの汗を流され、父なる神に祈られたその場所にいた三人の一人でした。

ペトロ、ヨハネと、ヤコブの三人が、主イエスの絶望的な苦しみの祈りに耐えられず眠りに逃れ、また、主イエスの父なる神への祈りを知り、更にその後、ユダが祭司長や、ローマ兵らに主イエスを売り渡し、彼らよる主の逮捕に立ち会った一人です。

主イエスは、その気になればやすやすと逮捕から逃れる力をもっておられた。それは、ペトロが剣で大祭司の手下に切りつけ耳を切り落とした時、主イエスはその耳を、元通りに癒された記事を見ても分かります。けれども、主はその力を用いられず、逮捕されました。

ヨハネは、その一部始終を見ていたのです。だから「神様がいけにえとして、お遣わしになられた」としっかり手紙に記しています。



ヨハネの手紙一 4章11節

¹¹愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。

使徒ヨハネはここで、神様がわたしたちを愛し、その愛のあらわれとして主イエスの十字架の死を、「いけにえの死」としてとりあげています。

主イエスの『いけにえの死』はヨハネによる福音書の決別説教

ヨハネによる福音書 15章13節

¹³友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。

と主イエスが言われた「愛」をはるかに上回る「大きな愛」です。

ヨハネの手紙一 4章12節

¹²いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。

実際に使徒ヨハネが指摘されたように、「いまだかつて神を見た者はいません。」この言葉に続くヨハネの手紙には、驚くほかない言葉が続いています。

「わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。」

使徒ヨハネは何と「神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。」とはっきり記しています。

使徒ヨハネは天の父なる神様がすべてを超越された真実(まこと)の神であることをここで明確に確認しました。それだけではありません。

「神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。」と、少しの怖れも表さずに、使徒ヨハネはわたしたちに、わたしたちだけではなく、すべての人間に言い切りました。これは、とんでもないことです。けれども、使徒ヨハネ自身

がこの言葉を手紙に記す前にヨハネが父なる神にすべてをゆだねて祈ったことは、疑う余地がありません。

ヨハネがすべてをゆだねて祈り、神様からの応答が与えられたこともまた、まったく疑う余地がありません。ですから、わたしたちはこの、ヨハネの確信を「神様が確認された真理」として受け止めるしかありません。そうなると、これは改めて、わたしたちの全てをもって、この聖書の言葉、三位一体の神に確認された言葉を「わたしたちの信仰のすべてを持って」受けとめ、理解しなければならない。

これは、言い換えれば、神様からわたしたちに向けられた最大の問いです。

「神はわたしたちの内にとどまってください」という言葉が、巨大な根っこの前提です。この根っこは勝手に判断することができません。けれども、この根っこに、根底に、わたしたちが疑問を投げかけることができるのでしょうか。出来ます！

この言葉は「何を意味するか」と言えば、『神様が、使徒ヨハネの全てを、その信仰を、その真実を、その愛を、確認し、肯定された——うなずかれた』。だから、ヨハネはこう書いたと理解する他ありません。

わたしたちは、ここに、「使徒ヨハネがここに採りあげたすべてを、神様は認められた」と確信します。

ここから、使徒ヨハネの確信が「真理」として前提にできます。

この前提に依るとき、より大きな提題「**神の愛がわたしたちの内ですべてを全うされている**」ことが真理かどうか厳密に問われます。この問いは大きく分けると二つです。一つは「神の愛」が真理か否か。もう一つは「わたしたちの内に(神の愛が)全うされるか否か」です。

「神様の愛」については、真理であると最初から理解され、合意されます。

もう一つの真理命題「わたしたちの内に(神の愛が)全うされるか否か」は難問です。なぜなら、

わたしたち自身が問題であり、わたしたち自身が「真理」とは、とても言えないからです。けれども、わたしたち自身がこの問いに応えなければならぬ。

ここでは、わたしたち自身の確信や思いではなく、「神様」により頼むしかありません。あり得ないことですが、仮に「神様を信じ信仰を持つ者」と、「神様を信じない者」に分けることができても、わたしたち「神様への信仰を持つ者」自身が、その大多数がとても「真理」に遠い信仰しか持っていないと告白するしかないからです。では、絶望しかないのか？ 神の愛を全うする希望はあり得ないか？

「唯一つだけ希望があります。」と、言うしかありません。それは、わたしたち人間によるのではなく、更に、神様により頼み、神様からその力と信仰の決意を頂く希望です。ただ、神様への信仰が、神様によって与えられる限りにおいて、人間は「真実の愛に」「真理に」生きることができると結論し、神に祈り、求める道を歩みましょう。「神様の愛と、希望により頼んで進ませてくださる」。神様はそうしてくださいます。

祈り 讃美歌(21) 460「優しき道しるべの」

